

令和6年度 自己評価・学校関係者評価報告書

令和7年6月19日作成

学校法人華園学園藤ヶ丘幼稚園 園長 齋藤しのぶ

1. 本園の教育目標

◆教育目標

『つよいて よいて がんばるこ』

◆教育方針

- ・からだをきたえて元気な子どもになります
- ・誰にでも親切にする優しい子どもになります
- ・よく考えて一生懸命がんばる子どもになります

2. 本年度、重点的に取り組む目標・計画

令和5年度の保育活動を振り返り、教諭自らが子どもたちの主体性な遊びについて考え実践した1年であった。この経験を土台に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」子どもたちが伸びようとしている姿にどう教諭が支援していくか、またその先に繋がるチカラとして子どもたちを捉えていくことがさらに必要となると考え、下記の目標を計画的に実行していく。

- ①主体的・対話的で深い学びが生まれる教育
- ②地域の特色、国際社会に貢献できる人材を育てる教育
- ③学びの接続を目指す教育（幼保小連携）
- ④多様な人との関わりから学ぶ教育（保育の魅力を発信し続ける幼稚園）
- ⑤家庭と共に育む教育
- ⑥一人一人が輝く教育

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

	評価項目	評価	取組状況・考察
①	主体的・対話的で深い学びが生まれる教育	B	幼児期にふさわしい生活を保障していくためには、やりたいことをじっくり取組み、実現できる環境をつくっていくことが大切である。そのためには教師は、幼児一人一人が幼稚園生活の中で安心感や充実感を味わえるように支え、どのようなことに心を動かしているのかを見取りながらかわることで、幼児の主体的な学びが実現できると考える。 時間、場所、人的環境を見直し、園全体で確保に努めた。発達に応じた子どもたちの話し合い（サークルタイム）、そこから生まれる気付きや発見から遊びが発展していく過程が見られた。過程の中で様々なことを乗り越え、子どもたちなりのゴールにたどり着いた。達成感や満足感を味わった子どもたちは他の出来事にも意欲的に取組み、主体的対話的であることの大切さは実感している。 幼児期の深い学びを保障する職員の援助の加減等が課題。職員が声を掛け過ぎていたり、必要な分の援助、オーダーメイドな援助の仕方を行っていかなければならない。リーダーを中心に職員の学びの場の確保、園児の情報共有がより必要である。

②	地域の特色、国際社会に貢献できる人材を育てる教育	A	子どもたちの体験や経験を増やしたいという職員の願い、子どもたちの興味関心が結びつくよう交番やFu's スキー場、地下鉄乗車、藤野南小学校、藤野小学校、札幌南陵高等学校、札幌市が主催する「いきもの探し」を通して藤野地区の色々な公園に出掛けた。身近な自然や様々な人と関わり、地域の施設を利用し、この地域の良さを子どもたちなりに感じる機会を多くもった。体験経験から遊びが広がり、施設利用からさらに遊びが広がる、子どもたちの心を揺さぶる体験となっていた。この体験経験が将来の土台となると感じる。
③	遊びの接続を目指す教育（幼保小連携）	A	隣接する藤ヶ丘保育園と共に幼保小の接続期の大切さを感じており、交流の対象学年や交流の在り方など、意見交換や共同で学び合いの場を設けている。 藤野南小学校との職員間交流で年長児と1年生の交流だけではなく、年長児と5年生との交流を持つことができた。交流前、交流中、交流後の園児、児童の姿を職員間で共有することにより、次の交流がさらに良いものとなるよう努めた。園児は就学に向けての安心感につなげたい、児童は1年生間近の園児たちとの関わり方を学んでほしいという願いのもと、交流を行った。想像以上に園児、児童は相手を分かりながら交流を楽しむ姿が見られた。入学後の1年生の様子を小学校から聞き、幼稚園としては交流の良さを感じている。また、今後もより良い交流となるよう、共同で作成できる振り返りシートや打ち合わせの回数等を増やし、校種を越えた交流が必要とされる。
④	多様な人との関わりから学ぶ教育（保育の魅力を発信し続ける幼稚園）	A	令和6年度も引き続き札幌南陵高等学校との交流を継続。高校側の協力理解には心より感謝申し上げます。園児は多様な人との関わり、公共の場でのマナーを身に付ける、高校生は幼児の特性を理解し運動遊びを考え実際にやってみる、それぞれでねらいを定めていることもあり、ねらいや目標が達成できているか評価のポイントとなっている。園児は安心感を高めたり、褒められる経験から自己肯定感を持つことにもつながり、人と関わる楽しさを味わっていた。また、園児と関わる高校生の中には保育に興味を湧いてきた、という感想も多くなっている。
⑤	家庭と共に育む教育	B	幼児期の発達に応じた遊びを通した学びについて理解を示す家庭が多い。令和6年度は親子教室「たんぽぽくらぶ」のお手伝いの参加や「給食試食会」「園薬剤師さんとの懇談会」などをひらき、園での保育内容や取り組み組んでいる内容を知ってもらう機会を設けた。参加人数はまだ少ないが、園と家庭とで子どもたちの姿を語り合い、互いに成長を喜んだり励ましたりする関係性を強めていきたい。さらに、語り合いの場や回数を増やしていきたい。
⑥	一人一人が輝く教育	A	様々な園児が在籍している。本園では「特別支援コーディネーター」を配置し、その子に応じた園全体、クラス、個別の支援を検討し対応している。支援の在り方は実に様々であり、その子に合った対応が必要となり、的確に対応していた。今後も職員はより専門的な学びが必要となってくる。職員の学びの機会を確保し、連携機関との関係も強化していく必要がある。保護者へのアプローチも柔軟に対応していく。

4. 総合的な評価結果

評 価	理 由
A	教諭自らが子どもたちの主体的な遊びについてさらに考え、試行錯誤をした学び多い１年であった。この経験を土台に、幼児教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を捉えていく。豊かな体験を通じて、感じたり、気が付いたり、分かたり、出来るようになったりする「知識及び技能の基礎」気付いたことや出来るようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする心情、意欲、態度が育つ中で、より良い生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」子どもの自発的な遊びを通して、資質・能力を育む。教諭はそれぞれの発達の段階にふさわしい環境を整えることを意識し、保育を展開してしていくことが望ましい。

評価（A…十分に成果があった B…成果があった C…少し成果があった D…成果がなかった）

5. 今後取り組むべき課題

	課 題	具体的取組方法
1	環境	人もまた環境。友だちには年齢差や体格差なども様々。たくさんの先生たち、保護者もまた身近に関わる人たちである。近隣の学校との交流では児童、生徒、先生と関わる機会が増えた。様々な人と関わるの中で、社会生活との関わり、自立心、道徳性を学んでほしい。園舎内も職員同士が知恵を絞り、環境の改善に努めている。制限がある中でも、出来る限りの環境整備には対応してほしいと願う。
2	安全管理	支援を必要とする子どもたちへの対応として、園舎周りの改善に努めてほしい。園児の飛び出し防止対策が必要。職員からの要望もある。また、園舎周りの安全点検については園長を中心に確認を行う。
3	幼保小接続 地域とのつながり	幼保小接続：交流は計画的に行うことができている。しかし、園児・児童の共通理解には至っていないと感じる。本格的な交流は２年目となる。今後は課題を明確化し、管理職双方で確認を取らなければならない。幼小接続を考えるうえで重要なのが、子どもの学びをどのように発展していくかを理解すること。幼小の双方の関係者が「幼児期の『学びの芽生え』から、小学校低学年の『自覚的な学び』へ」というつながりを共通理解としたい。 南陵高等学校・大学生との交流：人と交流することの楽しさをたくさん感じて欲しい。その子なりに自己発揮できるようになってほしい。自分でもできる！このひと面白いな！楽しいな！たくさんの経験が子どもたちの土台になってほしいと願う。
4	保護者への 発信 保護者支援	保護者アンケートを行った。お子さんのこと、園のことを見守ってくれている姿勢があると感じる。教育目標や保育方針について御理解いただけていない部分があると感じる。HPや園だよりには子どもたちの遊んでいる姿を多く掲載していることもあり、楽しみにしている保護者が多い。子どもたちの充実した姿は保護者にも伝わっている。さらに、子どもたちが育っている姿を伝え、成長の姿を共に喜んでいきたい。お子さんの困りを相談できる園であること、また職員ひとりひとりが相談相手として保護者に寄り添えるように職員の育ちを促していきたい。